

芸劇eyes番外編 第2弾 13年9月12日(木)～16日(月・祝)

## 『God save the Queen』シアターイースト

「メトロ」 うさぎストライプ

作・演出:大池容子 出演:亀山浩史(うさぎストライプ)、李そじん、緑川史絵(青年団)、水野拓(青年団)

「クイズ君、最後の2日間」 タカハ劇団

作・演出:高羽彩 出演:橋本淳、伊藤直人

「蒸発」 鳥公園

作・演出:西尾佳織 出演:森すみれ(鳥公園)、野津あおい(サンプル)

「どこ立ってる」 ワワフラミンゴ

作・演出:鳥山フキ 出演:北村恵、菅谷和美(野鳩)、多賀麻美、名見耶ゆり、原口茜

「しーすーQ」 Q

作・演出:市原佐都子 出演:飯塚ゆかり、坂口真由美、吉岡紗良、吉田聡子

主催:東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団)  
東京都/東京文化発信プロジェクト室(公益財団法人東京都歴史文化財団)  
\*東京文化発信プロジェクト事業

## 台頭する若手女性劇作家の新感覚を目の当たりに

9月12日(木)から16日(月・祝)までシアターイーストで行なわれた『God save the Queen』(以下、『GsQ』)は、日本のみならず世界中でこれまでに行なわれてきた演劇イベントの中でも、きわめて稀少なものだったと言える。なぜなら参加した5団体すべて、作・演出家が女性の若手劇団だったからだ。26歳～36歳の女性が率いる、活動歴10年以下の劇団で、なおかつ(これが一番重要なのだが)、新しい才能として注目すべき人達の作品を、一挙に上演したのが『GsQ』だった。

芸劇には「芸劇eyes」という企画がある。観客には台頭著しい新しい才能を紹介し、劇団には幅広い観客と出会ってもらうことを主旨として2009年にスタートし、順調に浸透してきた。『GsQ』は、さらに若い才能をショーケース形式で紹介する「芸劇eyes番外編」の第2弾で、一昨年の第1回『20年安泰。』と同様、各劇団が20分の持ち時間で、新作を上演する形を取った。

参加劇団は、うさぎストライプ、タカハ劇団、鳥公園、ワワフラミンゴ、Q。うさぎストライプの「メトロ」は、地下鉄サリン事件を遠景に、言いたいことを言えた人、言えなかった人、聞いたのに忘れてしまった人などの思いの交差を、全力ダッシュや壁を押すなどストーリーと関係のない動きを掛け合わせることで一層鮮やかに見せた。タカハ劇団の『クイズ君、最後の2日間』は、インターネットの掲示板に自殺予告を書き込んだ人物とそれに

反応したネット住人達のやり取りを軸にしながらも、合間に挿入される政治用語を言い合うテニスのラリーが、実は見えないボールを使っていたというところにさらなる社会への斬り込みがあった。鳥公園の『蒸発』は、近所のニート男性を双眼鏡で観察して勝手に解説をつける女性ニートの妄想と、その妄想にさらに乗っかるルームメイトの会話に、何を糾弾しても尻すぼみしてヌルヌルと日常を続ける現代人の気味悪さを静かに告発した。ワワフラミンゴの『どこ立ってる』は、人とためきが普通に会話する不思議な世界で、大きな欠点と小さな魅力を抱えてのびのびと生きる人達をユーモラスに紹介した。Qの『しーすーQ』は、回転寿司で働く3人と、魚が嫌いなのにデートで寿司屋に連れて来られた女性それぞれの生い立ちや性癖を、映像も使いながら生々しさと軽さで描いた。

5作品に共通点を見出す人、それぞれの個性を感じた人、「女性っぽい」、逆に「ノージェンダーに感じた」と言う人など、非常に幅広い感想が寄せられたが、これまでの女性劇作家作品に多かった恋愛やトラウマとは全く違う、家族や異性や社会に対して新しい感覚を持つ作品が並んだことは大半の人が感じ取ってくれただろう。

こうした感覚をフォローするため、アフタートークゲストには、豊崎由美(書評家、フリーライター)、町田広美(放送作家、コラムニスト)、湯山玲子(著述家)、本谷有希子(劇作



撮影:引地信彦

家、演出家、小説家)、小田島久恵(音楽ライター)と、言葉を使って活躍する女性を幅広いジャンルから招いた。「今、演劇がこんなに刺激的になっているなんて」と驚く声も多数聞かれ、公演が終わってからの展開も期待できるイベントとなった。

文:徳永京子

日本・ベネズエラ外交樹立75周年記念事業 13年10月10日(木)～12日(土)

## 『エル・システマ・フェスティバル2013 in TOKYO』コンサートホール ほか

コンサート

指揮:ディートリヒ・バレーデス(10/10、11)

レオン・ポットスタイン(10/12)

管弦楽:エル・システマ・ユース・オーケストラ・オブ・カラカス

コントラバス:エディクソン・ルイス(10/10)

クラリネット:カリム・ソマサ(10/10)

ピアノ:萩原麻未(10/11)

各種ワークショップ、シンポジウムも同時開催  
ワークショップ●ペーパーヴァイオリンを作ろう!(10/11,12)●12時間でシンフォニーの演奏に挑戦!(10/10,11,12)●エディクソンと話そう!(10/10) シンポジウム●エル・システマと社会問題(10/10)●日本におけるエル・システマ(10/12)●ホワイトハンド・コーラス(10/12)

主催:駐日ベネズエラ・ボリバル共和国大使館/東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団)/一般社団法人エル・システマ ジャパン 招待・制作:KAJIMOTO



10月11日 コンサートホール演奏風景

## エル・システマ 未来を担う子どもたちのために

家庭の経済状況に関わらず、すべての子どもが無償で音楽教育を受けられる、南米ベネズエラ発の音楽教育「エル・システマ」。子どもたちはオーケストラのなかで音楽を楽しみ、協調性や規律を身に着け、目標に果敢に取り組みながらや人生に希望や誇りをもてるよう育まれている。同国では現在約40万人の子どもに提供され、世界50カ国で、各国の実情に合わせた形で展開されている。

若手指揮者グスター・ボドゥダメルに代表される世界的な音楽家を輩出していることでも注目が集まっており、今年のザルツブルク音楽祭がエル・システマの特集プログラムを組んだほか、世界各地で、彼らを紹介する大規模な特別イベントが開催されてきている。

こうした環境の中、日本・ベネズエラ外交樹立75周年記念事業として、東京芸術劇場、シモン・ボリバル音楽財団、駐日ベネズエラ・ボリバル共和国大使館、そして一般社団法人エル・システマ ジャパンにより、日本で初めてエル・システマ・フェスティバル in TOKYOが開催された。「エル・システマ・ユース・オーケストラ・オブ・カラカス」(以下、EYOC)のコンサートを中心に、エル・システマに関するシンポジウムや、実際のプログラムを体験できるワークショップが濃縮された3日間であった。

EYOCのコンサートは、その大規模編成の魅力を十二分に感じさせるものであった。チャイコフスキー、ショスタコーヴィチでは若

さ溢れる圧倒的なパワーを持ちながら一糸乱れぬ滑らかな音に感動したという多くの声を聞いた。また、カラカスでCD録音を一緒にした新進気鋭のピアニスト萩原麻未とのグリークにも、若手同士の共演とは思えない円熟味を帯びた哀愁を感じさせられる余裕を感じた。圧巻は、ガラ・コンサート(10日)におけるマッティンソン「コントラバス協奏曲」。史上最年少でベルリン・フィルに入団したエル・システマ出身コントラバス奏者、エディクソン・ルイスとEYOCのメンバーとの兄弟愛に満ちた甘美な旋律。思わず涙する人が多くみられ、ご臨席された皇后陛下も最後の団員の一人が舞台から去るまでスタンディングオベーションをなさっていた。

各種シンポジウム、ワークショップも大盛況で、満足だったという感想が多く寄せられた。なかなか一言で説明することが難しいエル・システマの魅力をもっと体感してもらえようと思う。

エル・システマ ジャパンが現在取り組んでいるのは、すべての子どもに届くよう、行政と連携した音楽教育の仕組み作りである。震災、原発事故で心に傷を負った子どもたちの心の復興に貢献すべく、福島県相馬市で指導体制や基盤づくりに奮闘している。保護者や地域社会への手ごたえも感じられ始めている。

エル・システマを必要としている子どもたちは被災地だけではなくと私たち考える。



ワークショップ「エディクソンと話そう!」

実は、今回のペーパーヴァイオリン作りのセッションに参加したある子どもの保護者が「息子には発達障害があるが、今回のワークショップは、とても楽しかったようです。母子家庭でヴァイオリンを習わせる余裕はないので、このような機会に参加できて感謝しています。」とのコメントを寄せてくれた。日本各地にいるであろう、困難な状況にある子ども一人ひとりに寄り添えるよう、最善を尽くしていかなければならないだろう。動き出したばかりの日本におけるエル・システマの活動が、今後ますます広がりを見せ、成果を上げていくことに期待している。

文:一般社団法人エル・システマ ジャパン 代表理事 菊川 稜



ワークショップ「12時間でシンフォニーの演奏に挑戦!」  
「エル・システマ」創設者  
ホセ・アントニオ・アブレウ博士  
最終日、オケのリハーサルに参加  
photo:Hikaru☆